

No.8 親孝行な花魁

江戸第一の花街吉原のおいらん(花魁)と呼ばれる女性たちは、単なる娼婦ではない。幼児から踊りや三味線など芸事はいうに及ばず、茶道・華道・和歌から古典文学まで教育されたという。大層な教養女性だったのである。

角海老楼の「おしょく」(人気ナンバーワンの花魁)愛宕大夫の本部屋。先ほどから、越後屋のご隠居と二人きり「御伽草子」の話に花が咲いている。閑な昼下がりの室内にゆったりとした時間が過ぎていく。

その静寂を破る花魁の粗相の音。「すー」

花魁：「あら、ごめんなされませ。わちきのカゝさまが、いま病の床に臥せてありんす。そこで、浅草寺の観音様に願をかけまして、月に一度大切なお客様の前で恥をかく代わりに母さまの病を治してくんなましと。」

隠居：「えらいねえ、えらい。若いのにねえ。なかなかできないことだよ、実にえらい。」

その瞬間またまた「ぷー」

隠居：「おいらん、さっきは月に一度と云ってたけど、二発目が出たよ？」

花魁：「はい、今のは来月の分」

隠居：「????」



